

美術教育の方針(八)

黒田清輝

▲本・源・の・修・養・法・を・改・む・べ・し

我藝術をして世界競進の時勢に立ちて特殊の光輝を揚げしめんには、古來の舊套に泥まず、又歐洲の成法に倣ふことなく、道理に適ひ、知識を博ふし新たなる發達の路を開かざるべからず、其路たるや本源の修養法を改め、歐洲に行はるゝ順序的教育法を採用し、人體を基礎とし天然に親接して、健實の研究を爲さしめ、又必要の學を授けて其知識を啓くにあり、現今歐洲は既に寫實の時代を經過して想を寫すの時代となれり、此時にありて天然の修養を我邦に行はんとするは時勢に後れたるの感なきにあらずと雖、我繪畫の技巧に長じて知識の缺けたるを思ひ、又我學風の着實なる研究に乏しきを思へば先づ此短處に向つて充分なる力量を養ふは最も適切の順序ならざや、今にして寫生を奨勵し技藝の本源を固めざれば管に外國と併び立つ能はざるのみならず明治の時代に適應したる繪畫をも産出せざるべし、天然を學び學理に通じて寫生の技巧一たび熟したる後は須らく情趣を舒べ、思想を寫すを勉めて以て我固有の美質を發揮すべし、これを發揮する手段は古來の技法にのみ依頼せずして天然より得たる知識を應用せん事を要す。

▲我・繪・畫・の・長・處

從來の繪畫の短處を知ると共に、又能く其長處あるを識別せざるべからず、日本畫の長處は技巧の上にあるに筆

の輕妙にして、描線の簡潔なる又陰陽起伏に拘泥せずして調色の温醇を得たる等は藝術の最も高尚なる技能に屬す、唯其高尚なるが故に之を濫用すれば不道理に陥る故に先づ道理的天然に熟して後始めて此の如き技能は施す□し、此技巧は實に我國民の天質たる美術心より養はれたる結果なり、未だ完全の知識備りたる學術とは見る能はず、之を學んとせば其形式を摸寫するの外無きなり、從來の修養法が摸寫を以て唯一の手段とするは實に止むを得ざる所なりと雖、繪畫の天然を寫す本意に背きて其結果たる技巧をのみ習得して、眞の目的を度外に置くは本末を誤るものなり、要するに日本の藝術は非凡の畫才ある小兒の如し、此小兒をして天敏の機巧を發達し其才器を大成せしめんには先づ資性の長ずる所を究めて之に適する畫風を豫定し之に應じたる學術をば順序を逐ひて授けざるべからず、若し然らずして徒らに自己の天才を恃みて其器を研かず、僅かに他の長技を摸倣するに満足せば到底成業に至らずして終らんのみ、今の繪畫を完成して世界に發揚せしめんには本源の修養を健實にし、今日の時代に應じ今日の思想を表するに必要な知識を完備して、之を我固有の長處に加ふるの方針を斷行すべし、眞に當代を表示し得る日本美術を養成するの道は唯此一途あるのみ (完)

『二六新報』明治三十三年四月一日

本文獻は掲載に先立つ明治三二年二月頃より、帝国大学総長や文部大臣をつとめた外山正一(一八四八〜一九〇〇年)の肖像画を描いたのが機縁となり、外山から求められて文部当局に働きかけるために黒田が記した意見書である。その経緯については、同じく『二六新報』の明治三十三年三月二四、二五日付紙面に掲載された以下の記事に記されている。

美術界消息

◎故外山博士と黒田清輝氏 是は寧ろ外山氏の逸事とするが穩当であらうが、亦美術界の一佳話として伝ふるに足るものであるから、本欄の店開として、先づ此事から始めることにした、

帝国大学では代々の大学総長の肖像油画を額にして懸けて置く例なので外山氏もそれが必要になつた、所で此肖像は御当人の望みの画工に囑む例になつて居るので、外山氏は黒田清輝氏を名差して頼んだ、但し相識の間柄では無かつた、が、己常黒田氏の画風には意を傾けて居たので。

右は一昨年十一月頃で、外山氏が例の図書館通ひを始めた頃の話。黒田氏は右の申込に対し、貴嘱謹んで承知した、然し拙者は他の画工の様に現在の人を描くに其の写真から画くことはお断りせねばならぬと申送つた、所が外山氏は無論お囑みする以上は実物を写して貰いたいとあつたので、黒田氏も快よく引受けた、

所で次に予め定めて置かねばならぬのは場所と時間の事である、私の宅でも宜いがチト辺鄙でお気の毒だから、いつその事私の方から貴下の美術学校まで行て描いて貰ふことに仕まじやうとの外山氏の申出でに、黒田氏も願つたり叶つたり的好都合を喜び時間をも毎日午後一時半と約束した、

兎角一度大臣でもすると、異に気取りたがるものだが、外山氏にはチツトも爾う云ふ風が無く、自分から美術学校まで通つて来ると云ふ其事が既に黒田氏に取つては非常に愉快を感じた、其上に外山氏の来るのがキチンと一時三十分で、一分たりとも約束を違へぬのには益感心したさうナ(未完)

—以上、明治三十三年三月二十四日付『二六新報』より

◎故外山博士と黒田清輝氏(承前) 斯くて此兩人は毎日相会ふので、種々な話から遂に絵画の談にも及んで見ると、仲々談せるので、黒田氏も段々本音を吐き、外山氏も大さう其の意見に賛成を為し、是非黒田氏の意見を実行して見たいと云ふ考を起したソコで兎に角其意見を一通り書いて見せて貰いたいと云ふ事になつた、黒田氏も是まで度々有力家にも話して見たが、ドウも心から解つて呉れて、ソレで其通り是非実行したいと云ふ様な篤志家に出つくはした事が無いので、此

の外山氏に対しては大きく知己の感を為し、早速一篇の意見書を作つて出した、今日の本紙上段に掲載し始めたる『美術教育の方針』は即ち其れである、是は未だ一般に公にしたことは無く、ホンの一部少数の当局者の間にのみ知られて居るのであるから、読者は十分精読玩味されたい

斯くて外山氏は之を文部の当局者及び美術教育に関して居る重立の人々にも見せ、越えて翌年(三十二年)の二月中は頃であつた、右の人々凡そ十幾名と云ふを、外山氏が会主で某所へ招待し、段々各自の意向を聞いた所が、皆な其趣意には大賛成であると云ふ事で、外山氏も黒田氏も頗る満足で其時は散会した、

ソコで各自十分の考案を立てた上で尚第二會を催し、今度はいよいよ其の実行方法を相談する筈であつたのが、段々と延々に成り、遂に今日に到り加之肝腎の外山氏が図らずも冥土の人に為て了つたので、黒田氏は少からず力を落して居ると云事。知己容易に得難し、洵に一大恨事と謂べきである

——以上、明治三十三年三月二十五日付『二六新報』より

外山を描いた肖像画は明治三二年秋に開催された白馬会第四回展に出品され注目を集めたが、大正二二年に惜しくも焼失したという(隈元謙次郎「黒田清輝の中期の業績と作品に就て中」『美術研究』二五昭和十六年七月)。

本文献中の、とくに「最近の傾向は想を写さんとす」(明治三十三年三月二十八日付)の章で示唆される象徴主義的傾向の明治洋画史における位置づけについては、田中淳「序論——明治中期の洋画」(東京国立近代美術館『写実の系譜Ⅲ 明治中期の洋画』展図録昭和六三年一〇月)を参照。また東京国立博物館には本文献および引き続き『二六新報』に連載された「美術界消息 黒田清輝氏の美術教育に關する意見書」(本書八三〜八九頁)の原本が所蔵されており、これについては吉田千鶴子編「黒田清輝の意見書」(『近代画説』五平成九年三月)を参照されたい。